

# 男子やり投げの技術史的研究

室田 恭佑 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 黒須 朱莉

キーワード：男子やり投げ，技術の変化，競技環境の変化，用具の変化

## 1. 緒言

近年、陸上競技投てき種目（やり投げ）のレベルが世界的に上がってきている。このようなパフォーマンスの向上は、どのようなやり投げ技術の改良によって生み出されてきたのだろうか。従来のやり投げの技術に関する歴史的な研究には岸野・多和（1972）のものがあり、やりの握り方、やりの運び方、助走、投射といった各局面における技術の変化はあつかつているが1964年以降の変化は対象になっていない。また、やり投げの技術史において重要な画期となった1986年の男子やり投げの規格変更に着目した研究に、宮口ら（1986）の研究があるが、新やりに対する具体的な投てき技術までは検討していない。以上の先行研究の検討から、本研究は1965年から2015年までの男子やり投げの技術の歴史を描くことを目的とした。そのために、対象時期の男子やり投げの技術の特徴や変化を、背景や要因をふまえながら明らかにすることを課題とした。

## 2. 研究方法

文献調査を行った。1966年から2015年までのやり投げ技術に関する日本で発行されている文献および雑誌を調査対象とし、計12冊の文献資料を収集した。そのなかから技術について書かれている記述を抽出し、1965年以降の技術を保持走、クロスステップ、構え、投げ出しの4つの局面に分け、その変化とその要因をまとめた。

## 3. 結果と考察

第一章では、1965年から1985年までの技術の変化をあつかった。その結果、1968年に

土からオールウェザーへ競技環境が変化していることから競技環境の変化によって助走（保持走・クロスステップ）、投げ出しの技術への影響があつたと考えられた。特に、クロスステップ技術は1968年以降、J・ルーシスやJ・キンヌネンによる技術や「ヨーロッパスタイル」が主要な技術になった。

第二章では、1986年に男子のやりが規格変更に至った経緯とその内容をあつかった。規格変更の直接的な要因は、1984年のウベ・ホーンの世界記録によって競技環境における安全性の問題が出てきたことにあつた。規格変更により、やりの重心が前よりになったため、飛距離が抑えられ記録の低下が見られた。その他にも、印跡判定が困難であつた点が改善され、やりの材質も金属に統一されるという変更があつた。

第三章では、規格変更年以降の技術の変化をあつかった。規格変更後は、助走（保持走・クロスステップ）や投げ出しの局面でのスピード面が重要視されるようになった。その内、クロスステップ技術に関しては、主流な技術が、「ヨーロッパスタイル」から「リニア型」へ変化した。また、投げ出し技術では、規格変更以降は後ろに反った状態からの起き上がり動作の重要性、新式のやりへの力の加え方、理想の投射角度が明確になり、上半身の動きが重要となった。

引用・参考文献

吉田雅美（1993）最新陸上競技入門 ヤリ投げ，ベースボール・マガジン社。